

# 宮古島の墓制について

—墓地制度の分類の試み—

岡本 恵 昭 (平良市総合博物館協議会会長)

はじめに

先島を「南島文化圏」とも呼ぶ。その文化の特徴を、島々の葬制・墓制の形態や分布で考察したい。墓地は人間の歴史の足跡であり 文化の影響と変遷・時代の流れと死生観の移り変わりを知る重要な所在で、信仰の依り所となっている。メモリーのある所で、現存者の希有する先祖祭祀の対象物件でもある。将来、家社会の抱える墓地や霊園の形態の多くは、個人的な志向性に依ってデザイン化され、葬法も変化する。しかし、その本源である「死生観」は不変で、先祖とのおびつなと結び目を断つことは不可能である。つまり、先祖あつての自己存在がある。如何なる社会変化や進化があつても、個人の問題には、死の現実の結果であるからだ。墓はこうした人々の時代変化に対応して、形は変化してもその墓の持つ先祖神安処の場所—聖地—には変化はあり得ない。

島の形態・地形・地質・風俗・民間信仰の状況にそうように形成された墓の形態を、ここに分別して名称を与え解説を試みたものが本論である。一応、時代の変遷を考慮しつつ分類・解説を例をあげて行ったものであることを了解してほしい。珍しい名称を持つ墓や、形式・伝説のある墓（アヤグニ—墓・八重山墓）についても例記してみたい。さらに「門中墓」「亀甲墓」についても、寄留民によって伝来した技法をとりあげ、当地に現存する墓地文化様式として紹介を試みたい。

墓地文化様式の展開は、時代の変化に応じて変化するものである。琉球石灰岩地質の島で生死を共にするに、死の儀礼は死体の処理から始まった。古き時代から死生観のまかせるままで原始風葬を葬制とし、自然発生の洞穴を利用した、境界（結界）空間を石を積んで囲いをすることで、<sup>1</sup>「墓地空間」を認識した。

その後、人工的に横穴へと移行し近代的な石塔墓地へと変化していく。時代の変遷に関わらず、墓の信仰は深源である。

## 宮古島の墓の形式

◎宮古島における墓の分類形態について（沖縄全体の墓は横穴式と平地式の二つの分類が通説である）。

○崖上墓・壁龕墓（崖下の洞穴を利用したもの）（自然洞穴を利用したもの）

○洞穴墓・洞穴囲い込み墓・捨て墓（風葬）

○横穴式墓 →岩穴龕墓、丘（崖）を掘込んだもの、切り込み掘り抜き墓（掘り込み式墓地）。崖を奥行へと深く掘り込んだもの。縦穴と横穴で岩を掘り込んで囲った横穴式墓地。

○平地式墓地→墓地をコンクリートなどで平地に構築する。火葬による墓地様式の変化。

○亀甲墓 →丘陵を掘り込んで墓室をつくり庭・門・ソデを石切やコンクリート、又は石材にて形成築構する。

○家形墓、破風墓、ミヤーカーカ、石積石棺墓、箱形コンクリート墓、定形（棺箱様式）墓（これは、家形の様式で前方に飾り付けや、ひさしを長く出して、宮殿形式にした近代の墓地様式）、大和墓地（石材を組合した石塔墓、大理石で組み建てた墓地）

以上、個々の条件で分類を試みた。

墓は、筆者の30年余の僧侶としてのフィールドにおける民俗調査研究した対象物であった。そして、墓制・葬制の変遷をテーマとして考察してきた。ここに民俗用語としての、墓制度の分類を1件ずつ解説したものである。様式＝(形態)・(建造技法)という方法論で、外形を整理し内容を特徴づけることに重点をおいた。本論は、分類が重複したり、同じ内容を繰り返し定義の中で重複した項もある。いづれも、十分な比較検証の中での論究ではなく、あくまでも初歩的な分類試論で題目を作成したものであることを申し述べておく。

### 洞窟墓

洞窟を方言でガマと呼んでいる。自然に造成された洞窟には広いところもあるが、狭い洞窟もある。洞窟の横穴の場所に死者の棺を安置したり、捨て置いたという形式の墓地が洞窟墓である。死体を安置した場所を葬所と云う。そして祀る人、拝む人々との境界を石積みで造る。石積みは天井まで積み上げることもあるが、3～4間の石積で周辺を囲いとしたものである。風葬形式の葬法である。この様式の分布は広く、最も原初的な墓式である。

今日、洞窟葬は少なくなったがそれでも身近にあって、葬所として利用されやすいものである。

類似するものに、「岩下墓」や「崖上墓」の2つの横穴式墓地があげられる。いづれも風葬墓、投げ込み墓、捨て墓の類で、ここで云う洞窟墓はこの島のあちこちにある地下洞窟を利用して死者を置き、前囲みに石積みを作ることである。その石積みが死者の室（神のヤー）を閉じ込めて境界をつくる。それは密封するために土をこねて練り合わせ、石と石との空間をふさぐという方法をつかって、墓地を形成することに移行する。つまり、石積みより高度な技術や施工をほどこし、祭祀（祭りと儀礼）を行う側から死者の匂いを防止すること。すなわち死者のこわれゆく姿を観ることが出来ないようにしたと考えられる。

この墓地を利用する村では、ガマ墓と呼んで近寄らない場所であり、改葬もない。寄合墓地を持たない人のための間に合わせの葬地であり、或いは異常死・伝染病で死去した場合に、洞窟に葬ったものと考えてよいのではないかと。狩俣北海岸、島尻北海岸の丘陵地、保良、砂川、友利、新里などの元島への下る山の洞穴に多い。村落の地形および断崖や丘陵・段丘など、宮古本島では、東部や北部地域に地層の特徴がある。従って、風葬する岩陰や洞窟横穴の分布が無数にある。葬法は地域文化によって変遷するものであるが、洞窟様式より平地に建立する家形式のコンクリートブロック建立技法が発達してゆく。文献によると、沖縄本島でも洞窟墓は、古墓の基本形として極めて古い。沖縄の地域、地形によっても洞窟墓が利用されやすいということもあるが、地方においては積石墓や草屋根墓が古いタイプとして残っているとも云われている。

### 洞窟掘込み囲い墓（掘り込み墓）

丘陵に発達した崖下の洞窟を横穴式に広く掘り込んで葬地として囲いをする墓地。通常、横穴式墓地の形態をなすものと云える。前方に墓口を形成して石積みにする方法である。次々に遺体が安骨安置される。洗骨カメを伴う場合には、掘り込み囲い墓の入口周辺を外気の出入り不可能なシックイ（石灰）で壁にしてしまう。墓の出入口は（玄室の場合）石灰岩の粗石を使用して閉めたり、切石で組み合わせたりする。又、閉じめ石を使用したりする。玄室の外は墓の前庭にあたり、祭祀の場所となる。その庭を囲い、石垣で門構えをする墓が家族墓、一門墓、寄合墓へとそれぞれ分類されていく。

今日、横穴式の掘り込み墓も事前に崖層を掘り抜いて墓の内室（墓のヤー・神の座）をつくるという。「掘り抜き墓」、「横穴式墓」の形式も人工的に作られたものである。墓掘り込んで庭をつくり、さらに横穴を掘って天井を高くし、内部を円形の広がりにする掘り抜き墓地も一般的である。

### 石囲い境界墓（石を積むと云うこと・石囲いの境界性・呪力性について）

崖下での風葬は、奥行きが平坦であれば、そこに小さなサンゴ石灰岩のレキ石を並べ、放置された骨は集められた状況又は、自然放置の風化もある。改葬や二重葬の人為的な儀礼による骨の移転や分別移動はない。又、かつて地方には洗骨という儀式や、他の地所（葬地）よりの移葬はない。

石積みの囲いが、墓地をしっかりと空間的に区切って境界付けをしようという意識の派生であることは前にも述べたが、境界・結界の石を積むことは、結界空間を作為することで、死霊（悪霊・アクマ・マジムン）を封じ込むことである。石積みには、境界や聖・俗の呪力を作る石（サンゴ岩）を用いるので、後々には墓地でも死霊供養が為されるようになったと考えられる。

## 崖下風葬墓（壁龕墓）

### ①類似する墓地形式

- 崖下墓   ○洞窟石囲い墓地   ○岩陰墓地   ○風葬墓
- 横穴墓地   ○寄合墓地（ユリヤーバカ、もやい墓地）
- キガズン墓（アクマ）   ○狩俣の瀬戸岬崖下の壁龕墓
- 保良のマチャの墓   ○友利元島仲原七又の壁龕墓 などがあげられる。

### ②埋葬方法（ステル、ハフル、ダビ）

一次葬で、一度限りの納棺を目的に遺体を棺におさめて、龕（ガン）や担ぎ棒（ユースガイ）を用いて運ぶ。石積み及び石囲いで境界をつくる。後に祀ることはしない。これをステルと呼ぶ。（注1）

大神島及び島尻集落では洞窟墓や風葬長墓が利用されていた。島尻南（パイ）の峯の長墓（ナガバカ）が風葬墓で時代も古く、被葬者も知られていない。洞窟葬の中では例えば崖下風葬墓様式に分類される。島尻元島（フツムト）の先端の海に向かった小さな洞窟には古い人骨が多く、貝類の副葬品も出土している。島の人々はここを「風葬墓（ガマ）」と呼んでいる。

島尻集落には「パイヌンミヌツヌピッタ」・「イリヌンミヌツヌピッタガマ」の名の長墓があり、又「ミヤーンバリ（地名）」と呼ぶ崖上墓群が今日でもみられる場所がある。棺を置く場所にサンゴ岩の小石を平らに敷きつめて、周辺を石積みで囲い玄室としている。一次葬で伝染病にかかり病死した異常死（キガズン）を埋葬する墓地と、丘の並びに岩陰を利用した寄合墓地がある。

#### 注1、風葬としての積石墓について

- 「宮古島においては、子どもの亡骸は箱に入れられ埋めることもせず、捨てられており、70歳以上の老人が死んだ時のみ・・・云々」として、子どもの死体をそまつにする風俗を紹介している。
- 「畑の中に石を積み上げて、この中に棺を持っていくから共同墓地になる・・・」  
多良間島の離島、水納島などは石囲いの積石墓（シャーラ）であったという。

（大森義憲「宮古島の葬制」『南島研究』7号、1967年）

#### シャーラ墓＝石積墓

シャーラ墓とはサンゴ礫が円形及び長方形に積まれた墓地のことを云う。主として畑の中や野原や丘の上に見られる古い墓地形式である。元島や現在の村落の畑や杜に多く分布する。

砂川元島や上の杜、元村落、友利元島と上の島、宮国元島と上の杜から上の島に移行する畑や野原に、サンゴ礫がピラミッド形に積まれた場所をシャーラという。かつて、この

シャーラの中より人骨や貝類などが出てきた。シャーラは、死者の遺体の周辺に積み上げた「石積墓」である。

### 洞窟墓地

- ①洞窟墓（ガマ墓）は、島のいたる所に自然に造形された洞窟を利用して死者を埋葬すること、その葬地の空間を石積みで境界をつくり墓地とすることである。
- ②大きな広さのある洞窟墓は、その奥を墓地としたり、周辺の横穴を掘ってそこに埋葬することができる。ここでの埋葬は死体を棺に入れて安置すること、又は放置することを云う。
- ③小さな広がりでも奥行きが浅い洞窟（例えば崖穴のようなもの）は、洞窟全体を埋葬墓地として利用する。一般に村の家族墓や一門墓のように利用する。

### 住屋遺跡の埋葬施設 —埋葬墓の形態について—

報告書によると三タイプの埋葬施設と改葬遺跡の礫石土壙墓が発見された。三タイプの分類は以下のようになっている。（『住屋遺跡（1）—庁舎建設に伴う発掘調査報告書—』1992年3月、平良市教育委員会）

- ① 土壙墓—土を掘り壙を設けて、埋葬施設とする葬法。
- ② 石棺墓—住屋遺跡の場合、最初に小礫で底面を長方形に造り、四周に石灰岩礫やサンゴ塊を積み、箱状に造り上げた施設ですべて乳児墓である。
- ③ 礫敷土壙墓（仮称）—土を掘り、壙を設けて底面にのみ楕円状に礫を敷いている。

推定年齢1～2歳児の幼児が葬られた。（この場合—基だけ出土）

※底面にのみ楕円状に礫を敷き、その上に幼児の遺体を屈葬で埋葬したことが確認できる。成人用埋葬墓は4基確認されており、埋葬頭位は北西向きと考えている。

土壙墓地としての形態を備えている。埋葬方法は、死体を仰向けにし、両腕は胸部で指を合わせ、両膝を立てている状態で葬られる。屈葬の状態で出土している。（成人の土壙墳）（以上は先島元島特有の埋葬方法である。）

以上の報告から推察される葬墓制は、沖縄のグスク跡や集落地より出土する埋葬墓遺跡と極めて類似する。時代的な変遷はさておきとして、生死観念においては、死体の合理的な処理—屈葬の体位、すなわち手を両手合掌形に組み立て膝で場所をとらずに埋葬する。そこに、おのずから、魂の再生を意識した死霊に対する鎮魂儀礼がうかがえるように思える。石で結界を作る。砂やサンゴで不浄観を再生する魂へと持っていかなとする信仰は、この考古学的な改葬があったかどうか発掘遺構を調べてわかってくるのではなかろうか。また、改葬（二次葬＝移葬＝移動も意味する）された骨については、どういう形質の人骨であるのか、また、遺骨を分離配置することが意味のあるものかどうかを調査・考証する

必要があろう。形質人類学上に人骨の身分差、形質差、年齢差、等々の調査がなされねばならない。

### 仮墓（カリバカ、ユリヤー）

本墓地（家族墓）に入れない人物や、本墓地を開けることの出来ない場合に、墓地の横に小さく個人墓地を造る。これを仮墓と呼ぶ。別墓とか、寄合いとも呼ぶ。また、一時的に埋葬するために設置されたものから、中には洗骨をせずそのまま半永久的に放置され、本墓地に移葬されない無縁墓もある。

#### 仮墓の特徴

- ① 本墓地を造ることの出来ない年廻りにあつた場合に、仮墓地を増築して、後日、洗骨、改葬して移葬する。その場合、本格的な家族墓地となる。
- ② 埋葬の時、墓の造れない異常死（キガズンと呼ばれる）には、仮墓を造って埋葬する。その場合、本墓地のそばにコンクリートの長方形の仮墓を増築する。
- ③ 後妻（アトドミ）や育ての親、夫婦別れ（ミウトラバカーリ）の場合にも、本妻と共に埋葬せず、選別又は仮墓、寄合墓に入れて埋葬する。

### 巨石墓（ミヤーカ）－支石墓、巨石制墓－

ミヤーカについて、稲村は「宮古島に沖縄式の墓地が造られるようになるまでの、宮古古来の風葬墓地遺跡」であり、これは「巨石を以て囲われているために巨石墓地として、又、ドルメン（支石墓）に類似するためにドルメンの一種として紹介されている云々」との説を提示している。ドルメン（支石墓）説、すなわち巨石墓の形態は、先島宮古島が本土以外の文化を受け入れて形成されたとの仮説（「中国石工技法の影響」）を提出した金子エリカ・稲村の説として著名である。巨石制の報告書は、久松の「赤字立親ミヤーカ」を中心に、松原ブサギなど、三件以上の考古民俗学上の調査研究から出された推論とみることができる。

ドルメン説は、稲村賢敷の『宮古島庶民史』（1972年、三一書房）等にも紹介されている。なお稲村氏は、ミヤーカの石工技術の差の比較より、上級ミヤーカ（ハイクラス）・中級ミヤーカ（中級クラス）・下級ミヤーカ、その他の雑石積墓等に分類している。

○上級ミヤーカには

- ①伊良部町字伊良部にある「伊良部すさびみヤーカ」
- ②久松、久貝の「久貝ぶさぎ」「赤字立みヤーカ」
- ③下地町洲鎌の「川満大殿みヤーカ墓」「につりやみヤーカ」
- ④来間島来間の「すむりやみヤーカ」
- ⑤多良間島の「土原豊見親みヤーカ（ウブメーカ）」等がある。



○中級や下級、その他には新里の御舟の主の墓「あばなきみゃーか」、下地町洲鎌の「にゃーつみゃーか（沖縄折衷様式墓地）」、砂川のミャーカ、新里のアパナスミャーカなどがある。

この横穴式技法で墓口二つを石造囲いに切石を積んだ技法は優れているが、規模は狭小で、来間島の「あーすみゃーか」、布干堂の大立大殿のミャーカ墓などがある。

以上は『宮古島庶民史』（稲村賢敷著1957年）より引用した。

その他に考古学者・金子エリカの報告書（「久松巨石墓発掘調査報告・アカウダテウヤ（赤字立親）を探る」）もあり、

|                    |              |
|--------------------|--------------|
| 久貝巨石墓（久貝ブサギ）       | 14～15世紀      |
| 川満大殿ミャーカ           | 15世紀         |
| 来間大殿ミャーカ（スムリヤミャーカ） | 15世紀 となっている。 |

松原の赤字立親ミャーカについては、金子エリカ氏の巨石制につながる石工技法を持参した伝承の跡があるとして、中国からの帰化又は、渡来人の説を説明している。

一枚岩の石灰岩やサンゴ板、砂岩の石材切り出しは、すでに前離の地より取り選んで運搬したものと推定している。考古学的な発掘では第一人者であるが、洗骨・改葬—いわゆる死体の処理と改葬儀礼を行う習俗については、多くの問題がある。松原集落には三件以上のミャーカがあったと言われている。又、ミャーカは、城辺町新城にドルメン（支石墓）と推考調査された石造物も人工的かどうか確認されずにいる。盤石墓、石積墓、箱式石棺墓、巨石墓、いずれもミャーカ墓と関係深い表現と内容を持つ墓である。

#### 多良間島のウブメーカ（ミャーカ）

ミャーカとは、宮古島において15・16世紀頃につくられたとみられる石造りの墳墓である。切石積みで箱式の石棺を形成し、内蔵して周辺を石積みで囲い、正方形又は長方形に墓地として境界をつくる。石棺には石灰岩、サンゴ石を切り取って組み合わせる技法を用いた。必ずと云ってもよいほどフタ石に一枚岩もしくはテーブルサンゴの石板を切りとり、そのままにして石棺を被う形態でつくられた墓である。

多良間のウブメーカは、島の主長といわれる土原豊見親とその一族を埋葬したとつたえられ、祀られている。巨石を使用し、前方が破風状に造られた墓である。多良間ではミャーカをメーカと呼ぶ。「メーカ」「パカ」「門中墓地」などの呼び名で分類される。

#### 亀甲墓（沖縄様式）（1）（家族墓、ムヤイ墓、一門墓）

カミィヌク、カミィヌクー（亀甲）墓のことで、外形が亀の甲羅の姿をした掘り込み横穴墓地で、丘陵の岩を掘り込んで墓全体を亀甲墓地に似せて造成する。他は、沖縄本島の形式と石工技術、コンクリートや石灰（しっくい）を塗り込んで墓自体の形を築造してい

くもの。いずれも、しっくい、コンクリートで門がまえや石垣囲いを整備する。墓口は切石を奇数に組み合わせて閉じる。

沖縄本島の門中墓では主として亀甲墓が多い。宮古平良市西南の丘陵に、古い横穴式の墓地があるが、その中に亀甲墓がある。洗骨をする習俗があつて、壺屋のカメが並んでいる。

カミヌクー、亀甲墓（2） - 〈沖縄本島様式の形式に類似した墓地〉 - 門中墓（伝統性を重んじる）

① 沖縄本島の亀甲墓をこの地に移して造成し、当地で死去した先祖を沖縄式に埋葬し、7年、または13年、ウルウ年に洗骨して、壺屋焼の厨子ガメにおさめて、納骨棚に安置する。沖縄本島での「シルヒラシ」の様式と分かれて納骨の棚（石づくり）があるのが特徴である（宮古島では、洗骨して棚に並べるのはなかなかしない。本島出身の人か旧士族の家柄によって行うことが多い〈平良市〉）。又、移葬・新墓地移転の場合、特別に行う。

\*家族墓ではあるが、門中墓、一門墓に類似する。

② 亀甲墓は広い場所を必要とし、石垣や玄室の増築も費用が大である。使用管理する方式も門中関係の相徳で埋葬される。

③ 宮古島での亀甲墓の形態は、首里、那覇の出身者である一寄留商人一の出資によって、石工技術者を招いて指導を受け構築したものである。低い丘陵を横穴式に掘り込んで、玄室（シルヒラシ）の内に壺屋より買入れた骨ガメを並べ祀った。

④ 沖縄本島には平地に亀甲墓を造成する地域もあるといわれるが、幸地原門中のような「シルヒラシ墓」「洗骨後の奉安する納骨墓」は、宮古には習俗として入らなかった。

門中墓（モンチュウパカ） - （一門墓であるが門中墓の名称を用いている）

門中墓は宮古島にはない。（門中制度が無い）

門中墓は、男系血縁筋を同じとする一族、系を同類する家系をムトゥ、中ムトゥという信仰組織を持って墓地利用も共同で所有し管理する。もちろん祭祀（墓地）には、旧十六日祭のようなものはなく、清明や墓地の祭りが順序よく行事化される。家譜を持つ系持ちとその支流が門中を形成する。糸満の門中墓や首里の門中墓は広大な石造り・建造物の墓地をなしている。一門墓との呼び名は狩俣村でよく聞かれる。横穴掘込み墓や石門（アーチ）の囲いのある墓もある。一門墓と、「門中墓」についての区別も、近年になって島人に理解されるようになった。社会制度のなかで「門中」制度と墓・その管理と利用、“腹”の系図についても知るようになった。ただ、一門や、清明節の先祖祭・旧一月十六日祭との関わりや、地域の風俗についても文化の異差があることが分かっている。



### 一門墓（イツモンパカ）①

一門（イツモン、イチモン）と呼ぶ。男系中心の家系が利用する墓地を一門墓という。狩俣では男系、ウトウザ中心に一門となして主として墓を共通に使っていることを一門、ウトザヤーキ墓と考えている。一門という言葉に正確な規定はないが、かつて〇〇氏の先祖も同じだから一門墓に入るのであると言い伝えられ、今日までウトザヤーキが一門墓を使う。平良市では「根間墓」、「ツガ墓」、「豊見親墓」、「宮金ツンプン墓」、「ウイニイマ墓」、「四島の主・ツトバリ墓」、「池間大主の墓」等々がある。いずれも氏族の墓でその一系に順するものが墓地に入る。今日では、一門の名はあっても墓地の管理者との交流はない。

### 一門墓②

一門墓の表現は狩俣村から始まったと思われる。（『沖縄民俗』狩俣村一）

狩俣では、男系血筋の系統をピキと呼んで墓地をパー、パームトゥ、ムトゥと同称している。ウトザヤーキが使用する。墓地によって墓の入り口が左右のどちらかが選ばれる。入り口の二つある墓地は、狩俣村の横穴式墓の一般的な形態である。

「一門（イチモン、イツモン）」と「門中」とは異なる組織を持っている。

市内の文化財指定建造物「仲宗根豊見親墓」「ツガ墓」「知利真良豊見親墓」などについては、イチモン墓（トゥイミヤ墓も含めて）という形式をもって利用されている。いずれも横穴式、石積み囲い墓の形態を持った技術が見られる。歴史もあり、建築技法も優れ被葬者の権力を示すに十分な墓地である。

仲宗根豊見親墓—忠導氏、仲宗根家一門が葬られ、法号をともなったズシガメを安置する玄室や納骨堂もあって、特殊加工技術のある墓地として著名である。

寄合墓（ユラヤーズ、モヤイパカ）沖縄では、門中墓、破風墓形式が多い。

その地域に住んでいる人々が里或いは組織単位で資金を出し合い、墓造りの共同（ユイ）作業に労働力を提供した家族や人々が、将来においてその墓を利用することの出来る墓地を寄合墓（ユリヤーズ）という。又、近年では模合墓（モアイパカ、パー）とも呼んでいる。

狩俣の南の嶺にある墓地で、平民や一般の村人の寄り合い墓は、洞窟のように横穴に掘り込んだ墓で、墓口が二つあるのが特徴である。左右の二つの墓口の利用に際しては、上側は主たる造り主が入る墓地で、それ以外の寄り合い人は、代々まで下側の墓地を使用しなくてはならない決まりがあった。

### 家族墓（家形墓、沖縄での建造技法＝破風墓様式）

コンクリート造成墓、内地式石塔墓（納骨堂）がある。

家族墓は、家族を中心にその先祖と子孫の直系筋を葬る墓地で、所有は家族全体のものである。古くは洞窟石陵囲い墓や、横穴式の掘り込み墓がある。現在、コンクリート平地造成墓、墓地団地における規格形式（タイプ）のコンクリート墓、内地墓（納骨形式）、石塔墓地（石塔墓）などが考えられる。大和墓、一門墓も今日では家族様式の墓に変遷している。

久松では、寄り合いや一門墓地から、〇〇家先祖代々の墓として石塔にきざみ、屋号を表記する墓地に変わった。集団墓地では、納骨する玄室が地下に造られている。

### 個人墓（仮墓から石塔墓へ）

何らかの理由で個人のみが永久、半永久的に埋葬された墓地をいう。主として、一人で家族や身内から離れて葬られる墓地のことを「個人墓」と呼ぶ。

理由は、異常死、首吊りや毒物による自殺、事故死、家出して一人で死んだ者、伝染病（コレラ、赤痢）、レプラ（ハンセン病）などがある。水死者、特に海に投身自殺をした死体を異常死の代表的なものとして、葬式も通常の方法と異なったキガズン者として、個人墓を仮墓として作り、そこに遺体を投げすてるようにして葬った。従って、陸での異常死は、海での水死者に対して埋葬する墓もキガズン墓（怪我死、事故死）として区別した。一方、大和式の石塔墓地は、本土で戦死した軍人墓や本土出身者を火葬しそれを納骨する墓のことである。大和墓とも又寄留商人「内地墓」とも呼んでいた。

### 夫婦別入墓（家族墓、破風墓） - 池間島の墓制

夫婦別々に別れて墓に入る。埋葬される場所を一つとせず分かれて埋葬される。この墓制上の分類は、野口武徳氏の『沖縄池間民俗誌』（1972年発行）によるものである。彼はこの中で、池間島の葬制・墓制を検討して分類した。野口氏における墓制上の視点として池間島での夫婦別入墓の形態は次のようなものである。

- ① 母は家族の墓、父は先祖の墓、祖父は祖母の入っている墓（祖母の実家＝本家の墓）に入る。
- ② 父が死亡、母は後妻として再婚し、母は先夫や後夫の墓に入らず、実家の墓に入る。
- ③ 父は他部落の出身で他部落の墓に入り、母は池間の実家の墓に入る。
- ④ 母は、両親は早く死んだので、育ての親の墓に入り、父は実家の墓に入る。
- ⑤ 母が、早死にした孫（嫁に出した娘の子供）の所に行きたいと云い、娘の嫁ぎ先の墓に入り、父は先祖の墓に入る。
- ⑥ 父が入り婿の場合、死後、実家の先祖の墓へ入る。

⑦ ナーママスの墓へ母は行き、父は家の先祖の墓へ入る。

夫婦別入墓の葬制は変容していくが、その歴史は今日までいまだ解明されていない。いづれにしても今日では、コンクリート墓で、破風形式や亀甲の前面、墓口、袖口、門構えを利用している。一家、一墓地となって集団墓地に造築されている。また大理石（御影石）を用いた本土式の荘厳な建造墓地に変化している。

今日でもキガズン死、伝染病死、レプラ患者死、幼児死、漂流した死体は島の岩陰にアクマ墓として「アオグムイ」、「ユリヤーズ」などに葬る。この習俗は不変なものである。伝統ある葬法を守っているので墓制は変わらない。

#### ヤラビバカ、アクマ —— 池間島・狩俣村の場合

幼児墓を狩俣ではヤラビバカ、ヤラビパーと呼ぶ。、死産児、嬰兒の部類に入る幼児、6～7歳までの童子、童女などの死者を入れる。ムトゥパカ、一門墓や家族墓には入れず、狩俣ではフタツガー（集合墓地のある地名）の上にある岩陰墓、あるいは石積み囲いの中にソーメン箱に入れて埋葬する。

※ ヤラビ墓地は村で葬地が決まっており、童子、童女（5・6歳）の場合は号泣し、別墓に入れる。一次葬で終了し、その後の祭祀や参拝もなく位牌も立てない。そのヤラビパーの名をウチャマとフタツガー、山の間（谷間、バダ）の周辺をヤラビパーと呼んでいる。

近年は、洗骨できる場合に骨を拾ってムトゥ墓に入れ、また元墓を開く際には収骨してカメに入れて移す。

池間島では、童名の付けられない子供や、6歳までの童子（ヤラビ）の死体を、アクマと呼んで「お天道様に見せないように」と近親者が抱き、着物を頭から被せて木箱に入れて放置し、周辺に石囲いをして積み石で風葬墓を形成する。又、南の浜に童子たちの死体をくるんで埋め砂盛りをすと云う。洗骨はあまり行われておらず、近年になってから、ユタなどのお告げで幼児墓をムトゥ墓にいれるようになっている。水子は埋葬のままである。

平成になってからは、仮墓を造って埋葬し、或いは火葬にして本墓横に又は仮墓地や岩下を掘って埋める。穴を掘っている場合は、0～2歳までの水子の例がある。洗骨してから本墓地には入れる。死者が続いた時はアクマの頭に針を打つという。これは、著者の聞き取りである（『沖縄民俗調査報告書』沖縄県文化財保護委員会編）。赤子が生まれても、また次の子が誕生しても死産児という不幸つづきの末、アクマ（マシムン）の祟りとして死産した赤子の頭に釘を打ったという伝え話を確認した。かれこれ50年ほど前の話である。

### テラ墓（ツカサ墓）（池間島の神司墓）

テラ墓とは、主として島の神女の家系の中で神女（ツカサ）のみを埋葬する墓地をいう。池間島に分布するテラ墓は、円形に近い石垣またはたまご形をした石積みの囲いの上に、テーブルサンゴの一枚板をかぶせるように天井に置く。頭上に宝珠の形をしたサンゴの根の部分がある。このように囲いやそれを覆う石板にテーブルサンゴを使用する方法は宮古島では一般的である。内部には、区分された部屋が石積みで存されたり、そのまま円形の玄室の部分もある。本島のノロ墓と同類であるかどうか、葬制の比較伝承は十分に知られていない。いずれにしても、制度上、島のツカサ系の家が神を祀る祠（狩俣では大和神、遠見の竜宮化など祠の屋根の部分覆うサンゴ石でできている）なのである。テラ墓の内部では、改葬された跡があると云われているが確認されていない。大浦のガバテラ墓は、石積み墓でそこにもサンゴ岩が使用されている。他に砂川ウイピャーのテラ、島尻のテラ墓がある。

### 唐迎え墓（トウンカイフツ墓）

唐の国をトウのスマという。幻想的な富の島、一種の他界・常世の観念に満たされる「西方浄土」（ユートピア）、そこへ向かって墓口や墓の門（ジョー）を開いた墓地を「唐ンカイ墓」と呼んでいる。この地域でも風水が良いとされているか、久貝・松原の団地墓は全て門構えが西方へと、太陽の沈む方位に並んでいる。昔から「唐ンカイ墓」は墓地団地の入り口近くにあった。島では「唐迎え墓」と呼ばれた横穴式の墓地は広く分布しており、「テダガマ」（太陽の洞窟）と対称的にあちこちにあった。

### アラ地（アラドコロ）・埋葬墓（キガズンバア）（アラ地）

砂丘埋葬地・墓地（アラドコロ）は、水死者や漂流した死体の他に、伝染病で異常死した遺体の処理に、砂洗の葬地を選んで（村や字で選定される）埋葬する方法がとられる。

特別な死 — 異常なる死者は、アクマと同様に死体に宿り、伝染する悪霊が執着しているといって隔離する。村境外の海岸の崖か砂丘がよいとされる。砂は死体を早く処理して白骨化してくれる。つまり、浄化作用が大きいといって、異常死に限って砂浜に埋葬したという。各村（シマ）では、風葬場所の丘や砂浜地砂丘、石灰岩のゴロゴロした岩陰のある場所がアラドコロと呼んで恐れられている。

### 大神島の風葬地

宮古の北西部に位置する離島で、高さが74.8メートルあり周囲は2.3キロメートルからなる島である。島の高神（タカガン）が祀られている東の森には、聖地の「大神大御嶽」があり、禁足の地で石や草木なども勝手に持ち運ぶことはできない。また、島の頂上もト

ンバラという聖地で、頂上の下屋に割れ目があり、そこが西向きで並列の崖下墓地や前囲い石積風葬窟「岩陰墓」である。最近では、ブロック平屋形・破風形態の様式で島の西の浜近くに土地を求めて建造移送する家がふえてきた。また、本島高野集落に移住した人々は、近くにブロック墓を建築して墓の分家ができるようになっている。

### ツガ墓

平良市の指定文化財になっており土族、一門の墓地。パイナガマビーチへ行く旧墓地の集まった丘に、東西2つのツガと呼ばれる正方形切り込み式手法技法で巨門をアーチ形で作くり、内部の墓庭をツガのように真四角な形で構築している。ツガは、粟や米などの糧を計る四角いマスのことである。庭を四角に掘り下げ、面をなだらかにしてある。出入口のアーチも岩盤を掘った墓口も一つで、墓室は奥に円形の広がりを持つ。益茂氏の一系が造らせた「横穴式」の墓地である。「東ツガ墓」とその西手に「西ツガ墓」の2基が並んでいる。

### ツンプン墓

宮金氏の元祖・知利真良豊見親の墓といわれ、字西仲の真玉にある。ミャーカと沖縄横穴式の折衷形式をもつ墓地といわれる。ツンプン墓は、入り口正面に墓口を隠す石垣のツンプン(ヒンプンともいう)があり、参拝者の男女を分けて左右から通行するという。

玄関には洗骨の棚はなく、狭い室内にある。ミャーカ形式と横穴式の折衷様式は、ユツリヤミャーカ(下地町洲鎌)にあるが、いずれも切石を布積みで囲う技術はミャーカから得たものである。

### テダンカイ墓(太陽迎いの墓) テダバカ

友利元島東方に墓の門を開いた「テダンカイ墓」「テダ墓」がある。かつて、地元に住いた家族の墓という。太陽が昇るとき、光が墓口より玄室(ミューガマ、ガマンナカ)の奥へ直接入る構造といわれ、優れた石工技術がみられる墓である。その他、平良市の成川や下崎近くに「テダ墓」や「テダバカ」がある。

### 個人墓(平地式コンクリート墓)

近代になって墓地の様式は多様な形態で進歩し、増築されるようになった。コンクリートによる平地式の「破風墓」、本土式に増築するトラパーチン石材や大理石、御影石などによる石塔を持つ「内地式石墓」、地下に納骨堂を用する「納骨式大和墓地」、同様な造りの石塔家族墓(久松、松原、墓地団地)や十字架を石塔に置く破風墓(キリスト教信者の墓)など、カマボコ型の平屋ぶき墓もある。それぞれ先祖や有縁者を納骨又は埋葬する墓

地である。収骨式も変化していく。

いずれにしても墓地の形式は多様に変化したタイプで進展し構築される。石材もコンクリート型枠使用もさして変わりはなく歳月を経て出来上がる。墓の建立祈願をして、先祖の収骨と移葬をする。墓から骨を移葬するということは、個人とその先祖の一体化を意味する。先祖の系列に順じて並べて墓口を閉じ、新墓を持ったとして祝う。

市内には、近代墓地の並列した袖山墓地団地があるが、すでに各村でも出身墓地があり部落の共同墓が御友墓地になる。又、それぞれ家族単位で新しいタイプの墓が並んで建立されるようになった。個人墓から家族墓へと進歩する将来は、市・町・字別の近代式墓地公園の展開が望ましい。

### 水子墓（童墓）

みずこ（水子）、神の子（神のサー・サーリー）と呼ばれた古い神話と水のファーと言う。流産の赤子は、0歳児や2歳児迄の死産児である。命を途中でたたれて産道を出てきた赤子もいる。「おろす」などの行為で世に光をみない赤子である。

いずれにしても生命体を持って生まれ、不幸にして死産していく赤子はこれもキガズン墓に埋める。これをヤラビパカともいう。ボロ布でくるんで土中に埋め、その上に石を置く。胎盤は雨だれの軒下に、或いは台所の裏に穴を掘って埋める。今日では、本墓の「そで」に埋める。これといった葬式はしない。オジ、オバの手によって埋葬する（墓庭の右側に穴を掘り、墓庭の中に石囲いをして納める。胎盤状の物は昔は、シャコ貝を使用することもあった。小さな木箱で葬る）。儀礼はしないし後日の墓参りはない。改葬する人もいるが、そのままになって無縁のヤラビパカに捨て去られることも多い。近年は収骨して、タナバタ月（旧七月一日～七日）までに本墓に納骨するようになった。

### アヤグニー墓（横穴式掘り込み墓）

友利元島の海岸にある横穴式の墓地が通称「アヤグニー墓」として高度な石工技術を残している墓地がある。この墓を通る時に八重山の歌謡を謡うと祟りがあるとも言われ、そこから「アヤグニー墓」と称されるようになった。葬られた人がその歌の主人公であるともいわれている。この様に、特定の人物や、アヤグが伝承として残っていることは、死霊がまだ成仏されずに葬られていることを人々が信じていたということになる。祀られない無縁の霊は、怨念の霊気である「マジムン」、「ヤナムン」になり、謡う人に祟るといふ。又、プリムン（フレモノ）の原因やタタリは、マジムンにタマスを獲られた、持って行かれたとして必ず「パススニガイ」や「タマスウカビ」をする。アヤグニー墓は、横穴式の建造墓地で文化財的な価値のある石工技法が施されているといわれている。